徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告
Bull.Tokushima Pref. Torii Ryuzo Memorial Mus.
No. 5：1-18, March 2022

【論　　説】

鳥居龍蔵の南九州調査
― 鳥居きみ子『日向記行』の紹介をかねて ―

石尾　和仁[1]

はじめに

日本の人類学・考古学の草創期に活躍した鳥居龍蔵は，多彩な海外調査で注目されるが，その一方で国内調査の実績も数多い。南九州方面についても，1913 年（大正 2）の春，宮崎県知事有吉忠一の依頼で第 1 回朝鮮半島調査の帰途に立ち寄った西都原古墳群調査や延岡方面調査を皮切りに，その後も 1925 年，1926 年，1929 年（昭和 4），1930 年に宮崎県，鹿児島県，熊本県を訪れている。

西都原古墳群を訪れた最初の日向調査について，自叙伝『ある老学徒の手記』で「宮崎県知事より寺内総督に書面があって，私の帰途同県に立寄り古墳の調査をせられたい」とのことで，「佐藤氏を同伴，朝鮮から離れ，宮崎県に立寄って調査した」と記している［鳥居 1953］。

鳥居の日向調査については，田畑久夫氏が整理したほかは［田畑 2000］，回想的な断片的記述しかない［石川 1970］。しかも，田畑氏の論稿は鳥居の著作である『上代の日向延岡』にほぼ依拠していることから，調査時期についても誤った記述をそのまま引用して修正ができておらず，調査内容も鳥居の叙述をまとめたものである。

そうしたなか，近年は南九州調査に関わる資料が再発見されて次第にその様相が明らかになりつつある。宮崎・鹿児島調査については橋本達也氏がその意義に言及し［橋本 2020］，下田順一・大原賢二氏が鹿児島新聞の記事から行程を整理されるとともに徳島県立鳥居龍蔵記念博物館（以下、鳥居龍蔵記念博物館）所蔵のスケッチブックを紹介している［下田・大原 2015，大原 2020］。そして，熊本での行程や調査内容については，富田紘一氏や高木正文氏の整理がある［富田 2001・高木 2014］。その他，鳥居龍蔵記念博物館が所蔵する南九州調査関連資料については，その一端が「鳥居龍蔵の国内調査―沖縄・南九州―」展で紹介された［徳島県立鳥居龍蔵記念博物館 2014］。

こうした研究状況を受けて，小稿では，ある程度明らかにされつつある鳥居の南九州調査の行程を補うことができる鳥居きみ子の『日向紀行』を紹介し，南九州調査の意義について若干の補足を行うとともに，その他の館蔵資料についても紹介する。

一，南九州調査の時期と経路

まず始めに，南九州調査の行程を各調査ごとに確認する。

①1913年（大正2）春

第 1 回朝鮮半島調査の帰途，朝鮮総督府に勤務した経験を持つ県知事有吉忠一の依頼で宮崎入りしている。朝鮮半島調査から引き続いて美術学校の画家佐藤醇吉を伴っての行動である。有吉忠一は，神代三陵（高屋山陵・可愛山陵・吾平山陵）が鹿児島県内に治定されたことに対して，「古墳保存ニ関スル訓令」を出し，「我カ日向国ハ皇祖発祥ノ地ニシテ霊蹤遺蹟到ル処ニ存在スル」宮崎県の古代史を明らかにするために西都原古墳群の発掘調査を計画したのである。

その宮崎県による西都原古墳群調査は，増田于信（宮内省）・関保之助（東京帝室博物館）・黒板勝美（東

[1] 徳島県立文書館

京帝国大学)・今西龍（同)・柴田常恵（同)・坂口昂（京都帝国大学)・濱田耕作（同)・喜田貞吉（同)・三浦敏（宮崎県）らの第 1 次調査（1912 年 12 月～ 1913 年 1 月），鳥居龍蔵による第 2 次調査，小川琢治（京都帝国大学)・今西龍（同)・梅原末治（同）らの第 3 次調査（1914 年 8 月），原田淑人（東京帝国大学)・柴田常恵（同）による第 4 次調査（1915 年 7 月～ 8 月），内藤湖南（京都帝国大学)・今西龍（同）による第 5 次調査（1916 年 1 月），濱田耕作（京都帝国大学)・梅原末治（同)・原勝郎（同)・原田淑人（東京帝国大学）らによる第 6 次調査（1917 年 1 月）があった。このように，鳥居の調査は第 2 回のみであり，しかも宮崎県にはその当時の正式文書は残されていないという。田中茂氏は，宮崎県と各大学等との往復文書が残されているのに対して，「鳥井(ママ)招聘については，県からの派遣依頼文書の元となる起案文もなく，どのような思惑や経緯で宮崎県が博士を招いたか，県側の資料では不明」であるという［田中 1997］。宮崎県知事に就任する直前まで朝鮮総督府に勤務していた有吉忠一の個人的思いから，急遽鳥居の招聘になったものと思われる。諸費用も朝鮮総督府が負担していたことが，鳥居の自叙伝『ある老学徒の手記』からもうかがえることから，宮崎県の公的な記録には派遣依頼に関わるものが作成されなかったものと考えられる。

この時の宮崎入りの細かなルートや日程については，『宮崎縣史蹟調査報告　第 3』や安藤正楽宛書簡から確認することができる。それによれば，3 月 16 日に京城を出発，翌日門司に到着し，2 日間太宰府で調査，その後熊本で宮崎県書記田村正一と落ち合い，阿蘇山麓を通って三田井（高千穂）から宮崎県入りしている。その際，鳥居は，3 月 25 日に延岡から，4 月 7 日には宮崎からそれぞれ安藤宛の書簡を投函している（図 1・2)。前者には，熊本から阿蘇を越えて三田井（高千穂）を経て一昨日に延岡に入ったこと，後者では「当地の古墳」を発掘中であることなどを記している。

図 1　安藤正楽宛　3 月 16 日付書簡

図 2　安藤正楽宛　4 月 7 日付書簡

この時の調査は，高千穂の山間部で石鏃，石斧を実見し，延岡では貝塚・古墳・横穴等を見て，石棺が数多く残っていることを確認し，そこにこの地域の特色を見出している。その後，美々津，高鍋を経て宮崎に入り，ここで有吉知事をはじめ，県の関係者と打ち合わせをしている。そして，妻町の「祭土原」古墳群に赴いている[(1)]。この「祭土原」周辺は，国府及び国分寺，さらには延喜式内社である都万神社がある。

その後，再び高鍋に戻り，一宮ともよばれていた延喜式内社都農神社を参拝し，宝物を見学してから延岡に帰っている。延岡では古墳 3 ヶ所を発掘し，再び宮崎に戻り，大淀川流域を調査した。そして，西諸方郡の小林から汽車に乗り，球磨川にそって下り，熊本から帰京した。

鳥居はこの調査についてまとめた『宮崎縣史蹟調査報告　第 3』のなかで，「日向は我が祖先と最も関係深き地にして，天孫派の伝説は主としてこの附近より発す」と記しつつ，次のように書いている。

> 日向は，古来神代の地として，はた上代史の地として人口に膾炙し，人いやしくも我が国の上古に溯りてその史実を追想すれば，必ずや日向の地を想起せざるもの無けん。しからば今この古国日向は人種学上及び考古学上いかなる事実の存在せるならんか，予は今回の調査に於ては主としてこの見地に於て注意する所ありたり。［鳥居 1918］

そして，「天下古墳の記事を読まれて大いに感心」［鳥居 1935］した延岡の内藤子爵，内藤家に仕

えていた大島雅太郎，それに柴山博東臼杵郡長らが，後に鳥居に対して延岡調査を促していくことになり，1925 年（大正 14），1926 年の調査につながっていくのである。

この時の調査に同行していた佐藤醇吉は，1876 年（明治 9）に岩手県磐井郡沖田村（現：岩手県一関市大東町興田）の生まれで，岩手師範学校で学んだ後，一旦帰郷して代用教員を務めていたが，本格的に美術を学ぶ意志を抱いて上京し，1898 年に東京美術学校西洋画科の専科に入っている。1900 年 7 月に卒業した後の 1902 年には東京帝国大学植物学教室の三好学のもとで植物画制作に携わるようになった［熊谷 2018］。佐藤と鳥居は，帝国大学在勤中に知り合ったのであろう。佐藤は，鳥居が設立した武蔵野会にも参加しており，見学会等の参加者に佐藤の名前を見つけることができることから，二人の交流は宮崎調査以降も継続していたのであろう。この第二回朝鮮半島調査・宮崎調査後に開催された講演会で，鳥居は佐藤醇吉について「殊に本日御いでになっている佐藤君の労は非常なものであります。零度以下四十度の時に画を書かれたことの如き，通常の旅行ではなく，また通常のスケッチではないということをここに申し上げて置きます」と述べて，賞賛している［鳥居 1913］。この佐藤醇吉が宮崎調査で描いたスケッチ群が鳥居龍蔵記念博物館に残されている。

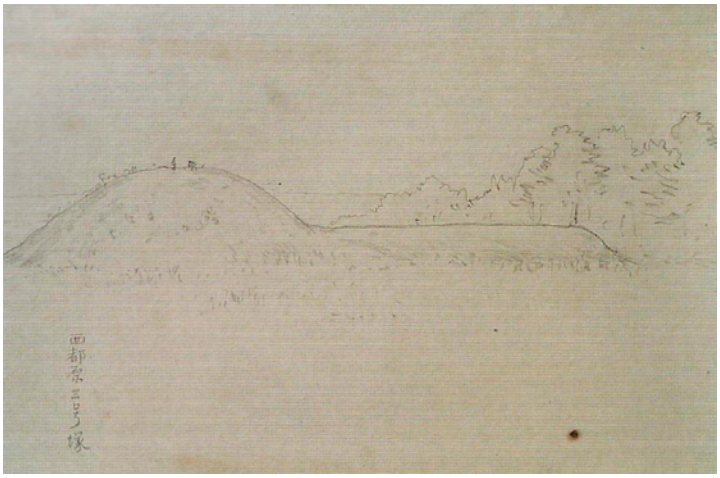

図３　佐藤醇吉による西都原古墳群スケッチ（現 35 号墳）

②1925年（大正14）秋

内藤子爵，大島雅太郎，柴山博東臼杵郡長の招きで，10 月に延岡調査を 10 日間余り実施し，10 月 28 日には延岡図書館で「延岡より見たる日向」と題して講演を行っている［鳥居 1926］。講演では，大正 2 年の調査も回想しつつ，延岡周辺の巨石遺跡や古墳について概観している。

③1926年（大正15）春

この時も東臼杵郡長柴山博の招きで，南方村・東海村・岡富村・恒富村・富高村・細島村などの古墳調査を行っている。4 月 10 日から月末にかけて川村真一・塙瑞比古を伴い，樫山・七曲・ミサキ森の古墳などを調査した。この間, 延岡図書館で「第三回古墳調査概況」と題して講演をしている［鳥居 1926］。

④1929年（昭和4）５月～７月

この年の調査については，同行したきみ子のフィールドノートが鳥居龍蔵記念博物館に残されており，あわせて鳥居自身が武蔵野会事務局の中島善之助に宛てた書簡が,「南九州通信」として『武蔵野』誌上に掲載されていることから，詳細に日程等を追いかけることができる。そこで，次節であらためて紹介していくことにするが, 概略を記せば, 5 月 4 日に別府に到着して長松寺のドルメンを調査, その後延岡に向かい子爵内藤家に滞在して 7 月 7 日まで浄土寺山・地蔵ケ森・三須の有粘土棺古墳・天下経塚山・大貫丸塚山横穴を発掘，大峡・可愛嶽・伊勢ヶ浜などの巨石遺跡を調査している。また, この間の 6 月には鹿児島県の三陵を見学している。

⑤1930年（昭和５）３月

1930 年（昭和 5）3 月，鳥居は，娘の幸子とともに鹿児島・熊本の調査旅行をしている。行程につ

図４　講演中の鳥居龍蔵

図５　鳥居の講演を聞く聴衆

図６　磯庭園の鳥居一行

図７　磯庭園にて

図８　集成館にて

図９　資料調査中の龍蔵と幸子

いては大原賢二氏が鹿児島新聞等から整理されているので［大原 2020］，その成果に依拠しつつ確認していこう。3 月 2 日に東京駅を出発，3 日の夕方に鹿児島に到着，城山山麓のさつま屋旅館に投宿している。5 日には鹿児島を出発し，加志木，国府，大口を経て，末吉では住吉神社山頂を発掘調査している。そして，志布志では鎌倉時代に勢力をもった横山党の居城跡や板碑を調査し，そのことについて志布志から私信を投函している。11 日には大隅の古墳群についての私信が鹿屋から投函されているが，この日には高屋山陵に行く予定であるとも記している。その後，薩摩半島にもどり，指宿の貝塚や開聞神社・坊津を踏査し，川内の山陵で組み合わせ石棺を発掘している。この新田神社が鎮座する山陵には，後述するように，前年にもきみ子とともに訪れている。鹿児島での調査成果については，18 日に鹿児島県立図書館大ホールで開催された講演会で披露された。石器時代にはアイヌ人の石器時代と固有日本人の石器時代があったこと，土器についても薄手派・厚手派・出奥派があることなど従来の自説である「固有日本人」説を踏襲したものであったが，福山中学校出土の岩偶や開港場としての坊津に注目したり，末吉町住吉のメンヒルや竹屋神社背後のストーンサークルなどの巨石について言及するなど，この時期の問題関心の有り様を示している。なお，この時の講演会の写真が鳥居龍蔵記念博物館に所蔵されている。

20 日には加世田のドルメンについて私信があり，その後熊本入りしている。熊本県では芳野村の巨石遺跡や宇土の宇土古墳壁画・豊田古墳彫刻文字について調査している［鳥居 1930］。その熊本調査については，富田紘一氏や高木正文氏が整理されている［富田 2001，高木 2014］。九州日日新聞・九州新聞の記事や鳥居龍蔵記念博物館に遺された図面等から調査行程を復元された高木氏によれば，熊本中学校の進藤担平氏の依頼で 3 月 22 日の夕刻に熊本駅に到着し，旅館研屋支店に宿泊。翌 23 日は明麗館で遺物調査をし，熊本中学校で講演をしている。24 日は拝ヶ石を調査し，25 日は宇土の曽畑貝塚，晩免古墳，楢崎古墳を調査し，不知火の不知火塚原 1 号墳，鴨籠古墳，亀崎古墳，宇賀岳古墳を調査して宇土で宿泊。26 日は鏡ノ巣古墳，陳内廃寺，メリ穴，尾窪横穴墓群などを調査，27 日に御領貝塚，阿高貝塚を調査し，宇土中学校で講演をしている。28 日には山鹿の鹿本中学校の臼塚古墳石人を調査し，臼塚古墳・鍋田横穴墓群・岩倉の巨石群などを調査している。29 日には明麗館で「考古学より見たる肥後の遺跡に就いて」と題して講演をし，30 日に熊本を立った。そして，この時の熊本調査を契機に，肥後考古学会が結成されたのである。熊本調査の段取りをした進藤担平の回顧によれば，鳥居を囲んだ宴席で「博士の来熊を記念して肥後考古学会設立の話」になったという［進藤 1967］。また，鳥居を熊本に招くきっかけになったのは熊本中学校寄宿舎のピクニックで「尾萩山の二キロ西方小山の頂上にストン･サークルらしい巨石群を発見」したことにあったという［松本 1967］。

図 10　阿高貝塚にて

二，1929 年（昭和4）の調査―『日向記行』の紹介―

この年の調査は，きみ子とともに神戸から瀬戸内海航路に乗船し，別府到着後は長松寺のドルメンを調べた後，延岡入りしている。この時も 1925 年（大正 14），1926 年と同様，内藤子爵邸に滞在しながら白土芳太郎・門馬博・橋口良吉・有馬七蔵・三好賢・和田耕作・宿屋信太郎らの助力をうけて古墳調査等を実施している。

この時の行程等については，鳥居龍蔵記念博物館に，鳥居きみ子の『日向記行』と題するフィールドノートを兼ねた日記が残されている。10.5 × 16.0㎝のサイズで 3 冊あり，そのなかに行動記録や調査内容などがびっしりと書き込まれている。分量的に多いことから，逐一翻刻していくことは控え，行程に関わる部分を中心に摘記していきたい（以下，斜体字がきみ子のフィールドノートの記述を要

約したものである)。

図 11　内藤邸の現況（現在の内藤記念館）
2013 年 3 月撮影

5 月 2 日（木）

*朝 9 時半，特急で**東京駅**を出発。英国の殿下が東京駅に到着されるため，到着ホームに緋の毛氈が敷かれてあった。**興津**あたりでお昼になった。*

*__京都__あたりから雨になった。京都は母のいるところでなつかしいが，数日前から世界漫遊にでかけているから寄らない。9 時 15 分に**三宮**に着く。**別府**行きの船は 11 時に運転を始めた。*

5 月 3 日（金）

*朝食は 7 時半で，船長も這入ってきて挨拶をした。10 時半頃**高浜**に着いた。私は**伊予**の方の海岸に岩の出っ張りがあるのを見た。遠くからスケッチをする。ドルメンのような感じがする。近づかなければよくわからない。私が日記を書いているときに，船長が絹張りの色紙を持ってきて，「世界的の学者である先生に何か一つ書いていただきたい」とおっしゃった。夫は，色紙に銅鐸にある船の絵を描く。*

*午後 4 時に**別府**に着く。亀の井ホテルに入った。離れの部屋に通された。私も温泉に入ってブルジョア気分を味わってみた。私どもはこんなところに来られないから何となく落ち着かない。*

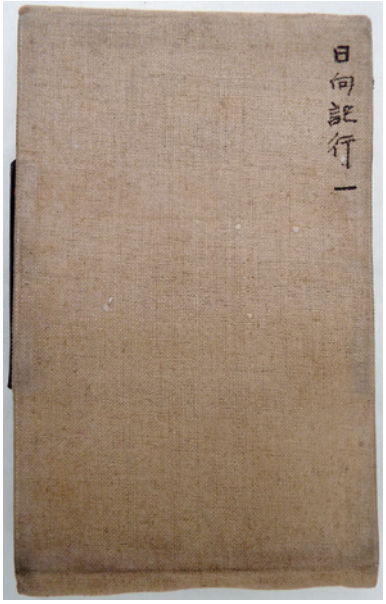

図 12　『日向記行　一』の表紙

5 月 4 日（土）

*朝 6 時に起きた。お湯につかって外出の準備をした。9 時にはお客さんがきて，6 人で一緒に**長松寺**の巨石遺跡を見に行った。お寺の和尚はなかなかの学者で，系図やお寺の記録を見せていただいた。お寺の庭には，驚くほど面白い巨石がたくさんあった。*

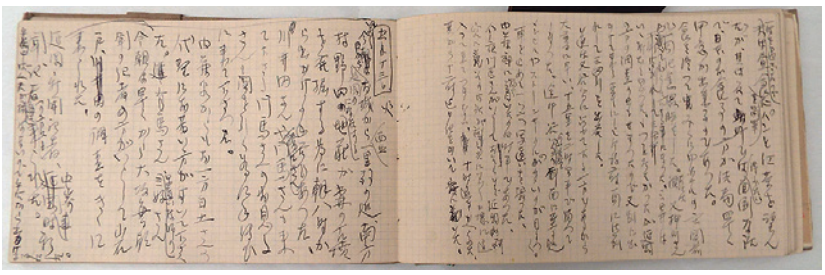
図 13　『日向記行　一』の見開き

*先年夫が調査したドルメンは半ば埋まっていた。裏の道路に沿ったところにがまの形をした巨石がある。本堂の裏にも大きな石を掘ってつくられた墓穴がある。**長松寺**の 50 ～ 60 メートル北に巨石がある。巨石の上部は穴が穿ってあった。その穴にツツジを植えたり，仏像を安置したり草が生えたりしている。亀の井ホテルに帰って昼食をとる。*

*1 時半に宿を出て，1 時 50 分の汽車に乗る。**日向**の国境までは登りである。トンネルの多いこと，数え切れない。同乗した**延岡**の笠原さんは，内藤家に忠勤して 37 年とのことである。日向国に這入ってからは急に明るくなった気がする。*

私どもは一同の案内で内藤家の応接室に這入った。

図 14　長松寺のドルメンと鳥居龍蔵

5月5日（日）

*朝9時半，先代の墓参に出かける。八幡宮の向こう側の山の麓にある**台雲寺**に至る。この門の通りの左側は年を経た古木が半分朽ちかけていた。これは別府の楠よりも古いものに見えた。*

*門馬村長を役場に訪ねた。昼食後は自動車で三井田道を行き，**経塚山**に至った。数多の人骨・剣・茶碗4個が出た横穴を見学した。*

5月6日（月）

*今朝，知事から12時頃に内藤邸に来るとの返事があった。それで**東海**に出かけるのを断念した。12時も過ぎて，1時頃に知事がいらした。誠に平民的で如才のない方であった。まだ若くて気に満ちている。宮崎のいろいろな遺跡地を巡るように勧めてくださる。*

*3時くらいになったので，東海に行くのはあきらめて，今日の内に**宮崎**に出かけておいて，明日県庁に知事を訪ねることにした。すると知事も賛成されて，明晩は一般公衆のために講演をしてもらいたいと言って，早速手配のため自動車で帰られた。私どもも白土家扶と門馬村長の4人で自動車に乗り，内藤家を出発した。宮崎までは3時間足らずで達するという。**美々津川**の渡は日向灘から直接波が打ち寄せてくるようで，太平洋のにおいがする感じだ。舟の着くところ，町の入口に**立盤神社**がある。案の定メンヒルがあり，鉄柵が巡らされていた。これは，神武天皇が美々津の港を船出するときに腰を下ろした腰掛け岩だという。しかし，これは正しくメンヒルである。社前の左側にも自然の石がたくさんあってドルメンのような感じのする石もあるし，メンヒルも2本あった。*

__美々津__を出て，__都農町__などを通過して宮崎に近づくと開けた地勢になってきた。__宮崎__に入って，大淀川の岸辺にある神田川旅館に投宿した。

5月7日（火）

*夜からの雨が降り止まない。唐傘をかかげた人，自動車，自転車，人力車が雨の**大淀橋**の上を行き交う様はほんとうに絵にしたい様だ。*

*8時半に知事官舎に電話をした。もう出勤していた。9時に雨の中を県庁に行く。白土家扶と門馬村長も一緒だ。この日は**青島**に行く。ビロー樹，芭蕉，タンチク，ハマウド，ハマオトモなど学名が木札に書いてあるのがうれしい。この島の海岸の岩は荒波に洗われて面白い形になっている。*

5月8日（水）

午前中，岩切さんが亡き父の収集された古物類を持参されたので，それを見た。古城の経塚と称している所から出た銭貨とその付近から出土した漢鏡については，私が拓本をとった。午後は，古城があったという小山に向かった。

5月9日（木）

__妻町__にある__都万神社__に参ったのち，__男狭穂塚・女狭穂塚・鬼の窟__を見た後，祭土ヶ原の古物研究所に行った。この研究所の陳列になる古物を拝見した。

夜八時に内藤邸に帰った。

5月10日（金）

__大貫__の前方後円墳を二つ調べ，__野田__では麦畑の中にある掘り抜き石棺を見た。その近くの小山の麓にメンヒルがあるのを見た。まだその辺に石がころがっていた。

5月11日（土）

__五ヶ瀬川__に沿って自動車で移動する。五ヶ瀬の流れは美しく，断崖の壁もあれば瀑布もある。谷川沿いにメンヒルやストーンサークルを見つけた。

5月12日（日）

*押方さんに**吾平山陵**へ案内してもらった。一町ほど越えたところに遥拝所がある。ここには相当に古い樹木があり，その中央に立石があった。まさしくメンヒルであった。*

5月13日（月）

***南方村野田**の**地蔵が森**の古墳を発掘するため，朝8時に出かける。門馬さんの息子さんらも関心をもって手伝いに加わってくださった。*

今朝早くから大阪毎日新聞や延岡新聞の記者も来られていた。

5月15日（水）

***地蔵が森**の発掘を続ける。昨日は八尺五寸あたりまで掘り下げたが何も発見できず，今日十二尺まで掘り下げて粘土棺を発見した。土を運び出すのも困難なほどの見物人だった。このあたりの人は古墳発掘に興味を覚えていて，みんな愛郷心からくるものである。*

5月16日（木）

***地蔵が森**に行ってみると，南側の中央から土が穴の中に落ちていた。例の熱心な人々が登って下を見物したものと思われる。人夫達をはげまして一気に穴の中の土を上げた。*

今日も宮崎新聞・延岡新聞などの記者がいらしておった。

5月17日（金）

午前中に粘土棺の全部を現し得た。処々から朱も見られた。写真撮影の時，三好さんがマグネシウムのためにけがをされたのは気の毒であった。宮崎新聞の伊藤さんも撮影をされた。調査は一つの棺に半日，二つで終日かかるから棺の全体が現れたが今日は切り上げることにした。

***地蔵が森**が移し祀られているという地蔵堂を見に行った。この堂も古墳と思われる丘の上に建っていた。*

5月18日（土）

夜半から降り出した雨は今朝まで続いた。今日は山岡知事が見学に来られる。

地蔵が森に行ってみると大きな穴の上にテントが張られていて，穴の中は少しも濡れていない。山岡知事が内務部長らとともに来られると，夫は早速古墳の説明をした。

5月19日（日）

*今日は**南方の天下**の経塚の麓にある横穴を調査した。地主の話によると，この中から耳飾り，茶碗，ふたつき，花立，矢の根が出たというが，役所が全部持って行ったという。*

5月20日（月）

今日は横穴の中の残りの土を掻き出して，見ずに通すという作業をした。その結果，35個の南京玉を得た。

5月21日（火）

*今日は御当主が故父上の墓参を終えてから私どもの調査に廻ってくると仰せられた。東臼杵の**大貫神社**のストーンサークルを調査する。*

5月22日（水）

***舞野**の古墳を調査。組立石棺を掘ってみると，既に掘られてあって土でいっぱいになっており，何*

が出土したかは知られない。午後四時頃から雨天。

5月23日（木）

*今日は先殿様の三回忌である。夫は先殿様の時から多年**延岡**の郷土研究を頼まれていた。今日の**延岡**の発展は全く内藤家があるからである。*

5月24日（金）

__舞野__に行く。人夫達は__地蔵が森__以来発掘に働いてくれているので熟練している。古墳は石槨式古墳と石棺との間といったような興味深いものであった。惜しいことに西の方の壁は既に取り去られており，天井岩も一枚足りない様である。

5月30日（木）

夫婦2人と内藤家の宿屋さんのほか，橋口さん，門馬さん，三好写真屋さん，運転手の7名の一行で行動。__延岡・高鍋__間は乗り合いや貨物自動車がひっきりなしに往来している。美しい街路樹がある。

途中，__都農神社__に寄る。国幣小社で，靖国神社をしのぐ檜造りの大鳥居がある。参道は砂利敷きで，太鼓橋がかかっている。

ここを出て，宮崎県官営茶業所に向かった。ここは以前に土器・石器が出たらしい。国道から10町ほど這入ったところはチャシのようになっており，石器時代には盛んに人が住んでいたと思われる好位置である。

その後，__茶臼原__に向かい，そこの古墳を見た。三段作りで埴輪が埋められている。古墳の周囲には堀もある。周囲には陸軍の軍馬の放牧場がある。

それから__妻町__へと急いだ。役場は選挙で忙しくしていた。ここの石槨を見た。

この5月30日の記述から，大鳥居をもつ都農神社に参詣したことがわかるが，鳥居龍蔵記念博物館には，都農神社で撮影されたものではないかと思われる写真も保管されている（図15）。また，宮崎県官営茶業所から土器・石器が出土したとの記述もあるが，これは高鍋町北持田の鬼ヶ窪にある遺跡で，鳥居龍蔵も「私は県庁から依頼せられて，昭和四年五月三十日にここを調査した」と記し，その成果については次のようにまとめている。

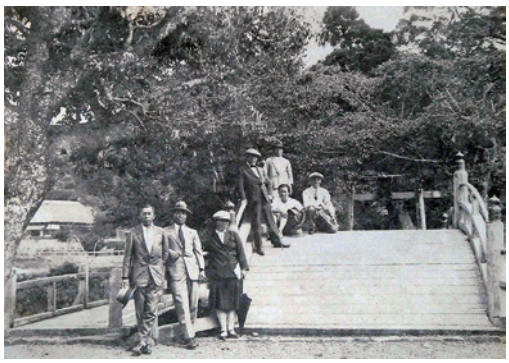

図15　都農神社にて

> 発掘遺物は，土器の他，石器としては石斧・石皿・凹石等である。この土器は全く弥生式土器に属し，吾人祖先の有史以前，すなわち石器時代のものである。（略）土器は立派な弥生式土器で，高坏・壺等が存在する。壺には色々の種類がある。この土器を見ると，延岡の巨石遺蹟から出るものと全く同じで，ここに包含層を残した民衆は，恐らく巨石遺蹟を造った人々であることが推考せられる。これらの遺蹟は純然たる我ら祖先の遺蹟で，縄紋式土器をまじえて居らない。
> 日向の石器時代には二時代がある。一つは縄紋土器すなわち先住民のもので，一つは我ら祖先のもので，日本人の先駆をなすものである。我ら祖先も日向に居住した時は，石器時代の文化で，この時代に巨石遺蹟が造られたのである。［鳥居1935］

このように，鬼ヶ窪の出土遺物を説明しながらも，自らが唱えていた日本民族の在り方についても言及している。

5月31日（金）

朝から横穴の壁画をスケツチ，拓本取り，写真取りをする。天井は家の形に削られてあった。壁画は面白いもので，横穴の入口左右の壁に彫られた人の形は野田の地蔵に似た石人そっくりである。

***上江村**の加藤という人の家の裏山に小祠がある。ここにも横穴が散在していた。*

6月1日（土）

*今日，**大貫村**の古墳を発掘する。**大貫神社**の宮司がお祓いをした。宿屋さんは連日来てくださった。六十歳以上の人の話によれば，五六十年前まで天神様の祠があり，それ以前は浄土寺という寺があった。そこで，ここを**浄土寺山**という。*

まず始めに，周囲の雑木を切り払い，古墳の全景を撮影した。それから発掘にとりかかった。十六人の人夫が掘り続けた。深さは五尺に達したが何も見えない。土は赤土と黒土の互層であった。

今夜は山口御夫妻と深更まで学術の話をした。

大貫神社は独立丘陵の頂部平坦面にあり，ここは古墳の主体部の場所にあたる。そして，周囲の裾部には巨石が配されており，ストーンサークル＝磐境が見られると指摘する。さらに大貫の浄土寺山にも柄鏡式の古墳があり，その粘土棺は「朱で詰められて居て非常に美しい」と述べている［鳥居1935］。また，竹櫛が出土したことに注目し，「頭部全体に向かって竹櫛を以て盛装して居り，しかもこれに大櫛があり小櫛があるのは，一層これを美麗に装うたのである。かくの如きは当時貴族社会の盛装であったか，はた死者を送る優美な盛装であったか，この点は何ともいえぬが，とにかく上代に於いてかく多数の竹櫛を挿いて装飾としたことを知られるのである」と記している［鳥居1935］。櫛は別れの象徴であり，近年では古墳から出土する事例報告も少なくないが，鳥居は大正期からここに注目していたのである。

6月2日（日）

*今日は日曜日なので，調査に行く前に教会に立ち寄ってお祈りをしたかったが，**延岡**の町中には天主堂が見つからなかった。あとで橋口さんにうかがったところ，**恒富**の方にあるとのことであった。*

***天神山**に着いたときには，人夫がかけ声をかけながら掘り始めており，午前中には六尺まで掘り下げていた。黒土と赤土の中から白い粘土が見えだした。果たせるかな粘土槨であった。土器の破片や石器の作りかけが続々と出てきた。*

6月3日（月）

8時前に御殿を出発した。宿谷さんが来てくださる。人夫はすでに来ており，早速掘りにかかった。橋口さんと一生懸命ピンセットとナイフを使って細かく発掘した。東の方を門馬さんが掘られた。そこから美しい朱が出てきた。櫛も見つかった。

6月4日（火）

この頃は晴天続きで，農家の麦の収穫も大方終わりに近づいている。農業のほか，養蚕業をしている農家も今年は上出来だそうである。

今日も橋口さんが来られて，早速昨日の残りの発掘にとりかかった。午前中に掘り終わると思っていたが，門馬さんが櫛を掘り出した。メスやピンセットで掘ると，後から後から出てきて，遂に三十八枚になった。

6月5日（水）

今日も粘土槨を掘り続けた。馬具か武器かが現れ始めた。掘り進めるには，西の方の土がさまたげになったので掘ったが，大雨になったので午後3時に中止した。あとは，粘土槨の上にテントを引か

せたり，周囲に溝を掘ったりさせた。

畑中の道路は雨が降ると自動車には不便である。土橋の土が落ちたり，丸太が抜けたりして危険なので，土橋の向こうまで七八町の道を歩いた。雨の中を歩いていくのも気持ちのよいものである。土橋を渡って迎えの車に乗り込んだ。

6月6日（木）

昨夜の天気から，今日も雨と思っていたが，すっかり晴れて大喜びで出かけた。棺の東西端を見きわめるために掘りすすめた。

見物の人は引きも切らず，村人が世界に珍しい遺跡を学界研究史料として後世に残しておきたいと申し出てきたのに，実に感心したのである。

全部発掘物を取り出し終わったのは八時半になっていた。ローソクをつけて畑中の道をたどっていくと，稲の芽が出かけた水田の中を蛍が一匹二匹と見えた。付近の村人はかがり火を焚いて田んぼで何かをさがしていた。雨後の田の中には鮒や鯉があがるのだそうである。

図 16　大峡の磐境

6月7日（金）

*5時に起きた。今日は**東海村**の**大峡**にメンヒルやストーンサークル，ドルメンの調査に出かける。*

***延岡**から北の方，鉄道線路にそって約二里余のところである。峠を越えたところの眺めは格別であった。*

図 17　大峡のドルメン

6月9日（日）

*曇天の空から雨がパラッと降ってきたが，**大峡**のドルメンを調査するため出かけた。すっかり雨の用意をして出かけて，途中で橋口さん，門馬さん，三好さんと落ち合い，大峡へ急いだ。*

ドルメンの下を掘りすすめた。

なお，鳥居は大峡などで見られるストーンサークルは，北部九州に見られる神籠石を関野貞らが朝鮮城壁と説くようなものではなく，喜田貞吉がいう神籠石の類であるとしている［鳥居 1935］。

6月10日以降はしばらく雨模様が続いたようで，この間は日記には雨のことばかり記されている。

6月16日（日）

朝は雨が降っていたが，昼には晴れてきた。数日を引きこもって整理やらスケッチをしていたので，太陽を見ると足がむずむずしてきた。

今日は久しぶりの天気になったことだし，町の人も私共の発掘を見たいとの申し出があったので，歓迎した。町の人は延岡の有力者で知識階級の人ばかり。非常に興味をもって見に来てくださるのが私共にはうれしかった。

*やっと出かけたのが2時半頃。**延岡**の医者である猪狩さんの案内で，濱から屋形船二艘に分乗，**五ケ瀬**の美しい流れを進む。汽車の鉄橋は五町もある。左右の流れは緑の草木に埋もれている。*

*海上一里くらいで**東海**の海岸に着いた。東海の人口は二百軒くらいで，東海の半島の山の麓に海岸に沿った一筋の美しい町である。*

*案内された**観音堂**には五六尺の碑が立っており，わずかに天正三年と見えている。堂は古いもので，観音の木像は四尺くらいもあろうかというかなりの出来のものである。そこを出て，観音堂の裏山の道のないところを登った。甕の破片や五輪塔があった。*

*それから古墳があるといわれるところに案内してもらった。ここは東海の丸山公園であった。東海港を見下ろし，眺めはよい。その後丸山公園の西の山にも案内してもらい，備前焼の甕などを見た。明日は，**可愛嶽**に登ることにした。*

6月17日（月）

4時に起きた。巻脚絆の仕度はすぐにできた。橋口さん，門馬さん，写真の三好さんと助手の方，そして人夫も三人来た。二台の自動車で行った。

御陵の前から登山した。道はよかった。危ないところは，夫は腰に綱を付けて青年が引っ張り上げた。二分の一くらい進んだところで松の下で休んだ時，眼下に見えた美しく広がった谷間一面にメンヒルが立っているのが見えた。そのメンヒルの周囲にはストーンサークルが必ず廻っていた。これを見て勇気づけられ，足許が軽くなったように感じた。

山岳部にある可愛嶽は，有史以前の巨石遺跡として鳥居龍蔵も報告しているが，この可愛嶽のほか，行騰や大峡でも巨石遺跡を発見している。この山間部の遺蹟のほか，海岸部の巨石遺蹟である細島（伊勢ヶ浜と米山）の遺跡もあわせて鳥居龍蔵は検討している。まず，可愛嶽のものは自然の石や運び込まれた石が立てられたり，一本の立石となったものの周囲に磐境が設けられていたと指摘した。

6月18日（火）

*7時ころまで寝てしまった。全山遺跡のような**可愛嶽**の不思議に，私は今一度**可愛嶽**に登らなくてはならないような気がしてならなかった。やがて橋口さん，三好さん，門馬さん，村上さんが来られた。皆，昨日の疲れが抜けないようであったが，橋口さんは早速整理に取りかかってくださった。*

6月19日（水）

今日は，夫の亡き母の命日である。教会に行ってミサを拝聴したいと思ってもこの町には教会はなかった。

*朝9時，門馬さんを迎えて**恒富村**に向かった。**恒富村**は川一つはさんで**延岡町**と隣り合っていた。最近，この村に窒素肥料会社が建てられ，この事業は成功し，大変盛んに肥料製造がなされている。この会社は個人経営で，朝鮮にも製造所を持っている。*

*国道を**三須**の方へ大野川に沿って曲がると山裾に，夫が往年すでに発掘したアイヌの横穴がある。そこには，恒富村長が横穴の発掘に関する事を明記した立て札を立てていた。その後，農家の裏山を登った。カボチャ畑があり，五六段に段を区別するため，葺石をしていた。門馬さんがやさしく主人にいろいろと尋ねていたが，主人はツッケンドンであった。ここは何も出ませんよと言ってみたが，先年ここで掘り出したものがあるという。さらに**三須の法明寺**に行った。*

この日は教会でのミサのことについて触れられているように，キリスト教信者としての側面が垣間見られる。

6月22日（土）

*7時半出発，**茶臼山**が半分切り取られた下を通って**三田井**に行く。麦の収穫が終わったところは水を引いて水田にする。**延岡**周辺は土地が肥沃で，麦が終わったとき，直ちに稲田に早変わりする。*

*延岡から二里くらい来たところで**行騰神社**の鳥居がある。鳥居から一里ほど進めば**行騰神社**の社殿があり，ここまで自動車で行ける。*

行騰山上に登った。巨石遺跡のある付近で門馬さんが弥生土器の破片を見つけた。

行騰は可愛獄の西方に連なる峰で，ここにある瀑布の形状が武人が着けた行騰に似ていることから付いた名称である。きみ子の記録にあるように，行騰神社の周囲にある「磐境」から弥生土器を掘り出し，また磐境の側から打製石斧を収集している。可愛獄と同様，この地も「神秘な巨石文化」の地であるとする［鳥居 1935］。

そして，6 月 24 日からは鹿児島県に向かい，神代三陵の踏査をおこなうことになる。

6 月 24 日（月）

*今日は三**須**の古墳発掘に出かける予定であったが，雨に降りこめられて出かけられない。そこで，かねてから**鹿児島県**の三陵を調査したいと思っていたので，降り続く雨の日を利用して 11 時 20 分**南延岡**発で出かけた。午後 5 時 40 分，**吉松駅**に着いた。ここで汽車を乗り換える。一時下車して，駅前の茶屋で休息した。午後 6 時 59 分の汽車に乗る。吉松をでてからはじめてのトンネルにかかる前に，左側の山にメンヒルやストーンサークルが見つかった。**鹿児島県**にも巨石遺跡の存在することが確かめられたのである。8 時 58 分**鹿児島**に着いた。さつまや別邸の人が迎えに来てくれた。*

*夜ではあったが，**鹿児島**の町はちょっと京都のような感じを与え，市中はにぎやかで電車が通り，街路樹があり，さすが昔日の百万石の城下であったことをしのばせるものがある。*

6 月 25 日（火）

*今朝は，8 時 30 分出帆の**垂水**行の船に乗船する。**鹿児島湾**内を横切って 1 時間で**垂水**に到着する。**桜島**は手に取るように目前にそびえている。*

*垂水から**鹿屋**に行き，**鹿屋**から**姶良山陵**まで往復五里のところを七円で自動車を借り切って行った。**姶良山陵**は参詣の人が少ない。あまりに奥まっているところであった。道は雨のために非常にいたんでいた。途中で車を降り，しばらく徒歩で進むと「東姶良山陵」の案内板があった。山陵は前方後円式でも丸塚でもなかった。私たちがこれまで見てきた古墳とは形や位置が異なっていた。そして，立て札はいかめしく参拝者は白袴紋付でなければならないと書かれていた。*

図 18　姶良村吾平山陵にて

*垂水の船着き場に戻ったのは定刻の 4 時を過ぎていたが，船は待っていてくれた。雨の**鹿児島湾**は何とも言えぬ景色だった。*

6 月 26 日（水）

*4 時半に起床。**西鹿児島駅**から**川内**に着いたのが 7 時だった。停車場の前の茶店で朝食を済ませた。隼人塚を見た後，町はずれにある城山のような独立した美しい山である**新田神社**に行った。土地の人は八幡社といったほうが通りがよい。裏道の階段を登った。**新田神社**は立派であった。*

*10 時 40 分川内発で，**鹿児島駅**に 12 時 30 分に着いた。次は，午後 2 時 15 分発で**国府**に 3 時半に着いた。ここで自動車を貸し切り，隼人塚から**鹿児島神社**，**高***

図 19　新田神社にて

*屋山陵に出かけた。運転手の話によれば，午後7時までには**国府**に戻れるとのことであった。*

6月27日（木）

*朝9時10分発で**吉松駅**に向かう。ここは，**延岡**から**鹿児島**に向かうときに1時間半ほど待たされたところである。ここで下車して人力車や自動車をさがしたが都合がつかない。私達は山道を徒歩で進んだ。天気はよく，谷間には鶯がよい声で鳴いていた。しばらく進むと**粟野嶽**が見えてきた。山は三つほどの嶺にわかれているが，巨石遺跡が存在している。**延岡**の**可愛嶽**のような荘厳さは感じなかったが，**可愛嶽**で見た人形の巨石と同じような巨石を見つけたので不思議な感じがした。*

*　**粟野**の駅に降りてきたのが午後3時過ぎで，駅前の茶屋で昼食をして4時発の汽車で**都城**に向かった。*

6月28日（金）

*　**都城**はハムやソーセージの生産があるので，すこしばかり土産に買った。9時発の門司行きに乗車，12時50分に**延岡**に着いた。途中周囲の景色を夫と注意深く見ていたが，**青井嶽**でメンヒルを見つけた。*

このように，6月24日からの5日間の行程で鹿児島にある姶良山陵・高屋山陵・可愛山陵の神代三陵を見学し，両県の県境付近にある粟野嶽では巨石遺蹟を調査している。なお，可愛山陵にあった新田神社を参詣したときの写真も鳥居龍蔵記念博物館に保管されている。

6月29日（土）

*　宿屋さんと門馬さんとで**三須**の古墳を調査した。*

この記事を最後に，きみ子の『日向紀行』も終了している。三須古墳の調査を最後に，7月に入れば，帰京している。

三，大分県別府の調査

鳥居は日向調査に際して，別府から九州入りしている。したがって，その調査前後に別府周辺での調査をおこなっている。

また，別府市では，1929年（昭和4）に即位礼大典記念事業として，『別府市誌』編纂事業が立ち上げられたことから，その先史時代及び原史時代の項目の執筆が鳥居龍蔵に依頼されている。これ以降，『別府市誌』が刊行された1933年（昭和8）までの間，鳥居は別府市や湯布院町などの現地調査を実施した。『別府市誌』冒頭の「別府市誌編纂顛末」のなかで，「有史以前の事蹟即ち考古学に関する部門は文学博士鳥居龍蔵に嘱託し，以て其記述を煩したり」と記されている通りである。

図20　長松寺のドルメン

図21　宇佐八幡宮にて

依頼を受けた鳥居は，『別府市誌』の「第二章　上代遺跡」を執筆し，別府市及びその周辺の「先史時代」「原史時代」の遺跡の概要をまとめている。その記述にしたがって，鳥居が調査した遺跡について記していこう。

まず，先史時代遺跡として，南由布村の遺跡や別府市の長松寺境内ドルメンを紹介している。その他，原史時代遺跡としては，塚原古墳群，石垣村石槨式東側古墳などについて記述している。そして，それらの評価として，「此等の地方に先史時代吾人の祖先が住居してゐた事が確證せられるのである」と記し，原史時代以降は「有史以前から此の時代へ多数の人類が棲息してゐた證據を示している」のであり，「此の好適の傾斜面に進出し半都会的群団をなしてゐたであろう」とまとめている［別府市教育会 1933］。

図 22　宇佐八幡宮の鳥居一行

また，1929 年（昭和 4）のことと考えられるが，鳥居龍蔵・きみ子夫妻で宇佐八幡宮を訪れていたことも確認できる。

四，日向調査から見た鳥居の研究視座

宮崎県での調査のうち，西都原古墳群については『宮崎縣調査報告書　第 3』でふれて以降，言及することはなかった。その報告書でも，ことさら西都原古墳群に限定して論究したわけではなく，「日向には海岸線に接近せる地方及び大河の河畔または山間の僻地に至るまで石斧，石鏃の類を見出だし得べし」，「これらの遺物を留めたる民族は，我が祖先と異れる民族の手に成りしものたるを信ぜんと欲す」，「今もしこれ等の民族に対して仮に神話伝説上より命名するとせんか，かの土蜘蛛の如き最も適当すべきものならん」などと記すように，日向地方全体を捉えて，しかも考古資料に限定したものではなく，民族論という大きな枠組みのなかで執筆しているのである［鳥居 1918］。この報告書では，他の研究者が西都原古墳群の調査成果に限定して執筆しているのに対して，鳥居は日向全体に論及しているのである［橋本 2020］。

日向に関する記述としては，その後は繰り返し調査を実施した延岡周辺の巨石遺跡や古墳の様相が中心となるが［鳥居 1935］，鳥居はそれらの遺跡群を有史以前の巨石遺跡，有史以前の遺跡，上代（原史時代）の遺跡に分けて論じている。

有史以前の巨石遺跡として，山岳部の可愛嶽・行騰・大峡の遺跡を，そして海岸部の巨石遺跡として細島（伊勢ヶ浜と米山）の遺跡を紹介している。まず，可愛嶽では自然の石や運び込まれた石が立てられ，一本の立石となっており，その周囲を磐境を作っているものがあるとしている。行騰でも磐境があり，大峡にも立石と磐境を発見している。同様に細島でも立石や磐境の存在を報告している。そして，次のようにまとめる。

> 延岡附近可愛嶽一帯の巨石群とともに，海岸地方にも互いに巨石文化の盛んに行われて居たことが知れる。しかもこれらはその伴う弥生式土器等の上から見て同一時代に属し，しかのみならず，これを築造した人々は有史以前の吾人祖先である。これらの遺蹟は普通の生活のものではなく，全く宗教上神秘的文化の発現である。［鳥居 1935］

このように，巨石遺蹟で発見される弥生土器から，日本人の祖先として鳥居が提唱した「固有日本人」の存在を想定しているのである。この当時の鳥居は，1917 年（大正 6）の畿内調査をふまえつつ，「固有日本人」説を提唱しており，この宮崎調査においても，この認識の上に各遺跡を理解しようとしていたのである。田畑久夫氏も「鳥居龍蔵は日向調査において自ら展開する日本民族および日本文化の起源や源流についての持論を確信した」と論じている［田畑 2000］。

また，有史以前の生活痕のある遺跡として，前述のように，高鍋町の鬼ヶ窪の場合を取り上げている。そして，上代（原史時代）の遺跡として，古墳の形態別に有粘土棺古墳（天下神社･東海村樫山･七曲・地蔵ヶ森・ミサキ森・三須・浄土寺山），有石棺古墳（小野ミサキ森・小野墓地・吉野）など

を取り上げている。

このような調査成果をふまえつつも，日向調査の総論的な部分では，「これまでのはみな西都原の報告とあつたのだが，私は日向を全体として調べねばならぬ，そうでないと駄目である」［鳥居 1926］と指摘している。しかも，それが日向一国にしぼられてもだめであって，「この地方から北九州特有の青銅よりなる銅矛・銅剣は存在しない。（略）甕棺も存在しない。この点に於いて，南端のここ一帯は考古学上北九州と大いにその性質を異にして居ることが知られるであろう」［鳥居 1935］という記述や，「日向の研究だからとて日向一体だけではわからぬ。九州，四国，中国より関東地方までかけて比較研究せねばならぬ」［鳥居 1926］という記述から察せられるように，より一層の広がりをもった比較研究が必要であるという方法論を繰り返し述べているのである。

なお，日向地方に対する鳥居の地域認識は，「宮崎県において横穴の一番多いのは，私の見る所では三田井の方がその中心である。三田井にはこちらで見るような前方後円とか円墳とかいうような土墳は絶えてなく，（略）この日向における横穴の分布というものは，思うに肥後の方面からの影響であろうと考えられる。（略）三田井の研究は肥後との関係や連絡を考えて見る必要があるであろう」［鳥居 1926］という言葉に集約されていると考えられる。すなわち，高千穂の山間部では熊本地方からの影響が強いと認識しているのである。

このような比較研究の視点が，この宮崎調査およびその報告からも読み取ることができるし，このことが鳥居の真骨頂といえるであろう。

おわりに

鳥居龍蔵は，日向調査の成果を書き記していくなかで，次のような表現をしている。

> 日向といえばすぐ天孫降臨を連想し，皇都についてもかれこれといわるるし，そは勿論必要であるが，それよりも土着神の研究が必要である。学術上からいえば土着神の研究から始めねばならぬ。（鳥居 1926）

> 古事記なり日本書紀なりに記述されている伝説，神話というものは，最初の話が伝えられてから，その文字となったまで，どれほど正しく伝えられたか，またはどれほど伝えが違って来たか，これはよほど研究して見なければならない。
> そして，これを編纂した時，その九州や日向の伝えというものは，これを語り伝えた人というものは，どうせ，大和とかないしは畿内の人であって，間接に間接を伝え語られていた事柄を文字に現したものであろうから，その内にはよほどの少なからざる相違もあることを想像して見なければならない。［鳥居 1926］

> 神代の時の事柄というものは，その当時から千年も，あるいはそれ以上も以前の前の話を語り伝えたものを，その後になってあつめて書き留めたものである。であるから，千年あるいはそれ以上もの間，それが口から口へと語り伝えられて居た時期が，その間にあったということを考えねばならないのである。［鳥居 1926］

> 当時大和の土地の人が，遠く距たつた日向の土地の伝説，神話を千年も時がたって後まで，たとえば古事記なら古事記の編纂当時ごろまで，正しく間違わずに伝えることが出来たかどうか，これは大いに怪しいものである。であるから，これらの神話・伝説をのみ基礎として，これによって研究するには，大いに如上の警戒注意を要する次第である。［鳥居 1926］

こうした表現が端的に意味しているように，鳥居龍蔵は記紀神話を客観視して疑いの眼差しで見

ているのである[(2)]。すなわち，明治から大正，昭和戦前期の時代に席巻した皇国史観やその思潮を彼は受容していなかったのである[(3)]。そして，神武天皇に先立つ「神代三陵」が鹿児島県内に治定されたことについても，「物は総て努力の結果に起こる。努力した人がいつも中心となる。薩摩人が努力した故に神代の遺跡はみな薩摩になって居る。日向はその時分それほどの努力をせなかった」［鳥居 1926］と述べて，それが作為的なものであったことを言い当てている。すなわち，天皇陵の治定についても人為的なものにしか過ぎないのだと考えていたのである。

それでは，このような歴史認識をもち，自らの調査で得られた成果に基づいて著作を編んでいくという実証主義的立場に立ち続けた鳥居龍蔵にとって，1929 年の「神代三陵」参拝は何を意味していたのだろうか。この「神代三陵」参拝という行動が意味するところを探ることによって，明治･大正･昭和戦前期を生きぬいた一人の人類学者・考古学者の生き様が垣間見えるようにも思われるが，この点については，今は明確な答えを見つけ出すことはできない。今後の課題である。

小稿は，鳥居龍蔵記念博物館が所蔵するきみ子のフィールドノート『日向記行』を中心に，その他南九州調査に関わる写真資料等の紹介を目的としたものである。鳥居龍蔵の南九州調査についてその一端を垣間見たものの，十分な掘り下げはできていない。今後，関連する館蔵資料にもあたりつつ，南九州の学史に果たした役割について検討していきたい。

（注）

(1)　「祭土原」という表記の歴史的変遷については，北郷泰道氏が整理されている。北郷氏によれば，中世末から近世半ばまでは「斉殿原」の表記が見られ，19 世紀になって「西都原」の表記が見られるようになるという［北郷 2005］。

(2)　鳥居は，東京帝国大学を辞職する 1924 年にも「歴史教科書と国津神」のなかで，記紀神話に依拠することなく，考古学の成果に基づいた教育の必要性を説いている［鳥居 1924］。

(3)　橋本達也氏は，「神話を考古学で証明できれば一層の光彩を放つとも述べ，また弥生・古墳時代の遺構・遺物を日本民族の祖先にかかわるものと位置づけ，それに天孫派という呼称をかぶせたり，日向でその最古の居住地を解明しうる可能性があるように言及するなど，鳥居の研究は神話と考古学を切り分けるようなものでもなかった」と指摘し，そのことが「多分に神代の顕彰を求めた在地史家に近接しやすい性質のものであった」と述べているが［橋本 2020］，記紀神話を客観視していた点については，春成秀爾氏や中村豊氏の指摘もある［春成 2003・中村 2020］。

（参考文献）

石川恒太郎 1970「鳥居博士と宮崎県」『鳥居記念博物館紀要』4 号　徳島県立鳥居記念博物館

大原賢二 2020「新聞が報じた鳥居龍蔵の鹿児島県調査」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』思文閣出版

賀川光夫 2001「大分県の考古学」『九州考古学』75 号　九州考古学会

熊谷常正 2018「佐藤醇吉「満洲探検回想録」をめぐって―一九一二年鳥居龍蔵の第二回朝鮮半島調査の記録―」『盛岡大学紀要』35 号

栗林誠治 2011「鳥居龍蔵と西都原古墳群調査」『鳥居龍蔵研究』創刊号　鳥居龍蔵を語る会

下田順一・大原賢二 2015「鳥居龍蔵の鹿児島調査関係スケッチ帳」『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告』2 号

進藤坦平 1967「鳥居博士を招いて」小林久雄先生遺稿刊行会編『九州縄文土器の研究』小林久雄先生遺稿刊行会

高木正文 2014「鳥居龍蔵博士の御領貝塚発掘調査―肥後考古学会はここから始まった―」『肥後考古』19 号

田中　茂 1997「鳥居龍蔵博士と延岡」『宮崎県史だより　通史編　第 1 回』宮崎県総務部県史編さん室

田中　茂 2001「宮崎県考古学史」『九州考古学』75 号　九州考古学会

田畑久夫 2000「鳥居龍蔵と日向―フィールドサーヴェイの分析を通して―」『昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要』9 号，後に同氏著『鳥居龍蔵のみた日本』（古今書院　2007）所収

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館 2014『鳥居龍蔵の国内調査―沖縄・南九州―』
富田紘一 2001「熊本県考古学史」『九州考古学』75 号　九州考古学会
鳥居龍蔵 1913「満洲より北朝鮮の旅行」『東洋時報』179・180 号（全集 12）
〃　1918『宮崎縣史蹟調査報告　第 3』（全集 4）
〃　1924「歴史教科書と国津神」『人類学雑誌』39 巻 9 号（全集 1）
〃　1926『第二回第三回延岡附近古墳調査』東臼杵郡史蹟調査会（全集 4）
〃　1929「南九州通信」『武蔵野』13 巻 5・6 号　武蔵野会（全集 4）
〃　1930 a「考古学上より観たる鹿児島県」『鹿児島教育』438 号　鹿児島県教育会
〃　1930 b「薩隈肥通信」『武蔵野』15 巻 4 号　武蔵野会
〃　1935『上代の日向延岡』鳥居人類学研究所（全集 4）
〃　1953『ある老学徒の手記』朝日新聞社（全集 12）
中村　豊 2020「戦後日本考古学史における鳥居龍蔵の再評価」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』思文閣出版
橋本達也 2020「九州南部における鳥居龍蔵の調査」徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編『鳥居龍蔵の学問と世界』思文閣出版
春成秀爾 2003「歴史教科書批判――鳥居龍蔵」『考古学者はどう生きたか―考古学と社会―』学生社
別府市教育会 1933『別府市誌』別府市教育会
北郷泰道 2005『西都原古墳群』同成社
松本雅明 1967「肥後考古学会の成立前後」小林久雄先生遺稿刊行会編『九州縄文土器の研究』小林久雄先生遺稿刊行会

＜出典等＞　図 1・2 は四国中央市立暁雨館所蔵，図 11 は小林久雄先生遺稿刊行会編『九州縄文土器の研究』（小林久雄先生遺稿刊行会　1967），図 16・17 は鳥居龍蔵『上代の日向延岡』（鳥居人類学研究所　1935），その他は徳島県立鳥居龍蔵記念博物館の所蔵である。